

説教 『十字架と主の光』山本 護 牧師
聖書 イザヤ書 2:4~5/マルコによる福音書 15:39

ローマ軍の百人隊長は十字架刑の現場責任者。その人物が「イエスがこのように息を引き取られるのを見て、[本当に、この人は神の子だった]と言った(マルコ 15:39)」。彼の中で何かが大きく変わろうとしている。百人隊長は、死んでいったイエスの何事かに打たれた。「神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂けた(15:38)」ことに驚いたのか。いや、「律法の終焉」など異邦人にはどうでもいいはずだ。

軍規に忠実な強面の百人隊長に何が起こり、「本当にこの人は神の子だった」とつぶやかせたのか。福音書が報告するのは、この奇妙な告白だけで、じっと見つめる読者は問いを抱え込む。異邦人、異教徒、十字架刑の執行者。信仰からまるで縁遠い者による「神の子」証言に、私たちは何を聞くのか。

イエス処刑を求めたのは同胞の信仰権威であり(14:64)、それを執行したのは武力で統治していたローマ帝国(15:15)。彼らに殺されたイエスは、「平和を実現する人々は幸いである(マタイ 5:9)」、「剣を取る者は皆、剣で滅びる(26:52)」と語る非戦者であった。戦争の代名詞である百人隊長が、その非戦者の死に立ち会い、「本当に、この人は神の子だった(マルコ 15:39)」と告白する。直弟子でさえイエスを「神の子」と言いえなかったこの時点において、なんと驚くべき「破れ目」であろうか。神の御手は、どんなに硬直した状況であっても、そこに破れ目をつくる。だが、その予兆に気づく者は稀だ。

「剣を取る者は皆、剣で滅びる(マタイ 26:52)」。だが「剣を取っていた者がキリストの救い」を見いだすことがある。百人隊長は剣を取り続けただろうか。それとも剣を鞘に納めたか(26:52)。聖書は彼のその後を伝えていない。剣を納めなければやがて剣で滅ぶことになり、「神の子だった」と思わず発した自らの声に忠実ならば真実が開かれただろう。あの時、十字架の周囲は絶望に覆われた。しかし十字架の力は底知れない。どんなに遠くにある者をも呼び出し、救いようのない者をも変革させる。

イエスの死で、神の救いを直感した百人隊長のその後を、私は自由に想像する。「彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする(イザヤ 2:4, 3:4)」。百人隊長は剣を鋤に打ち直して帰農したのではないか。そして武力および経済力頼みの帝国にあって「国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない(2:4, 4:3)」新たな世を夢見た。そんな日々、キリストを宣べ伝え始めた無名の弟子に出会ったかもしれない。元百人隊長もまた一人の無名の弟子となり「ヤコブの家よ(2:5)」と呼ばわる声に従い、すべての民に「主の光の中を歩もう(2:5)」と呼びかけた。彼のこんな変化を思い描く。

「主の光の中」とは何か。「主はわたしの光、わたしの救い、わたしは誰を恐れよう(詩編 27:1)」。剣は、戦う者を脅かす。しかし主の光は、そんな争い状態から私たちを解き放つ。「命の泉はあなたにあり、あなたの光に、わたしたちは光を見る(36:10)」。主の光は真実を露わにし、人間の脅えと渴きを命の泉で潤す。死んでいったイエスは主の光を発し、百人隊長はその光で真実を見、強く打たれた。

十字架の光に打たれた百人隊長(マルコ 15:39)。彼のように私たちも「主の光の中を歩もう(イザヤ 2:5)」ではないか。ひりひり渴いた咽喉を命の泉で潤し、剣と槍を打ち直すために祈り、動こうではないか。



【おまけのひとこと】

剣が鋤になるように 鋤は剣にもなる(ヨエル 4:10) 鋤や鎌は易々と武器に転用されていく 発電所が核兵器を産むごとく 手入れされた鎌なら槍に打ち直されまい 草刈ることが充足するゆえに